



Title	中国の都市公園の利用活動にみる社会・空間意識とその変遷に関する研究：上海黄浦公園を事例として
Author(s)	李, 華
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57530
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【39】	
氏 名	李 華
博士の専攻分野の名称	博 士（工 学）
学 位 記 番 号	第 2 3 3 8 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 21 年 9 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科地球総合工学専攻
学 位 論 文 名	中国の都市公園の利用活動にみる社会・空間意識とその変遷に関する研究 ー上海黄浦公園を事例としてー
論 文 審 査 委 員	(主査) 准教授 鈴木 毅 (副査) 教 授 奥 俊信 教 授 横田 隆司 教 授 森 一彦 (大阪市立大学大学院 生活科学研究科)

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国最初の都市公園である黄浦公園を対象とし、そこにおける市民による朝の利用活動を調査し、中国の伝統的な太極拳や劇曲などの「晨練」活動の実態を把握すると共に、活動している利用集団の社会空間意識及びその変遷を考察することを意図している。

第1章は序論であり、研究の背景と目的について述べる。具体的には、既往の人間一環境系及び人間の心理に関する研究を通し、現在急速に変容している中国社会の中で、伝統的な「晨練」活動における人と社会、人と空間の関係の形成と変遷を分析することの重要性を述べ、本論の位置づけと研究目的を記した。

第2章は序章の続きで、歴史資料と既往研究データを統合整理し、「晨練」活動を市民による公共オープンスペースの利用として捉え、社会的背景を詳しく分析した。また、公園・緑地の形成と発展、中国における市民の利用活動の特徴及び近年までの発展傾向を紹介し、伝統的な「晨練」活動が変化しつつあることを示し、以下各章における変遷についての分析のために準備した。

第3章は黄浦公園を対象として2005年と2008年2回行った調査に基づき、その「晨練」活動の実態調査を述べた。利用者構成、活動の時間帯と場所、活動内容と分類など基本データを示すと共に、各規模の利用者集団、特に現在活動している主な利用者グループに注目し、それらのメンバー構成、結成・発展の経緯や社会的所属を明らかにした。

第4章は利用者同士の間のつながりを分析し、利用集団をその内部構造によって、「同土型」「組織型」「師弟型」と「集まり」の4つのタイプに分け、それぞれの仕組みについて考察を行った。具体的に、前章で紹介した主な利用者グループのメンバーに対するアンケート調査を行い、「活動目的」「仲間意識」などにおいて大きく異なっていることが分かった。さらに、各集団におけるヒアリング調査で、「メンバー構成」「上下関係」「役割の分担」などを聞き取り、内部構造における異同の要因を考察した。

第5章は黄浦公園の各エリアを空間性質、社会的影響などによって分類し、それぞれ活動内容及び活動集団との対応関係を考察した。各エリアの空間性質と活動内容による対応関係から、社会的影響と活動集団の属性による対応関係がメインとなったことと、前章で述べた違うタイプの集団による棲み分けが存在することを明らかに

した。

第6章は2, 3, 4章で述べた黄浦公園における利用活動の変化に注目し、主な利用者グループの発展・衰退の経緯を通し、公園全体の利用活動の変遷を探った。それに影響を与えた社会的要因を分析した上で、公園の利用活動を4つの転換期として分類し、時期ごとの傾向をまとめた。主な社会的要因として、1990年代以降に行った中国の住宅制度改革によって地域によるつながりが弱くなったことと、1996年以降の全民健身のブーム及び2000年以降の観光推進措置による利用者の活動目的が変化したことを挙げた。

第7章は結論であり、以上各章のまとめを示した。また、「晨練」活動だけでなく、市民における屋外活動の目的や集団形式、公共空間が持つ意味などが変化していることに注目し、新たな公共オープンスペースの計画及び更なる研究の方向を提案した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国の公園における朝の利用活動「晨練」(チェンレン)に関する分析考察を行なった研究である。集団で太極拳や気功などを行なう「晨練」は中国社会における特徴的な屋外活動として一般にも知られているが実態調査に基づく研究はまだ多くない。本研究では上海の黄浦公園を中心とした文献調査とフィールドワーク(行動マッピング、アンケート、インタビュー)に基づく分析によって以下のような研究成果をあげている。

(1) 多角的な文献調査に基づき、中国の公園と黄浦公園の歴史、及び晨練の源である租界時代に生まれた近代体育以来の体育活動の歴史、さらに関連する社会的環境変化の歴史を詳述して、晨練に関する歴史の変遷を解明している。その結果、伝統的な活動と見なされている公園での晨練活動の概念が一般化したのは、1980年代以降と比較的新しい年代であることを明らかにしている。

(2) 2005年と2008年の二度の現地調査によって、黄浦公園における晨練活動の実態を明らかにしている。具体的には、一日の平均利用人数(平日 450 人前後)、属性(老年層中心。やや男性が多い)、9割以上が個人ではなく集団での活動であること(2〜4人から100人以上まで。一日平均130集団)、活動内容が武術、スポーツ、趣味、交流に分類できること(武術が最も多い)、また2008年は2005年に比べて、公的に登録されたフォーマルな集団が増えていること、武術の集団規模が大きくなっていること、利用者の住所が公園から遠くなっていることを明らかにしている。

(3) 利用活動のマッピング調査分析によって、各活動集団は活動内容(功夫、太極拳、気功、舞踏、風揚げ、交流など)、集団の規模や性格に対応して、質の異なる黄浦公園内のエリアを選択し棲み分けのな利用をしていること、またこれらの活動の場所はほぼ固定されており、場所を共用して利用するための暗黙のルールが存在していることを明らかにしている。

(4) 「晨練」活動の利用者相互の関係性(メンバー構成、上下関係、役割分担)に注目して利用集団の社会的構造を分類し、「師弟型」「組織型」「同土型」「集まり」の4つのタイプがあり、活動目的・仲間意識が異なっていること、また同じ集団も時代に伴って型が変化する場合もあること、さらに個人と集団の関係については、一人の利用者が、1日のうちに複数の活動集団に参加したり、集団の範囲を越えてつながりができるなど非常に柔軟な関係であることを明らかにしている。

(5) 主な活動グループに対するインタビュー調査を元にした、集団の年代ごとの変化(誕生、発展、型変化、分裂・融合、解散)を丁寧に追った分析によって、黄浦公園の利用者集団が固定的なものでなく、住宅制度の変化や周辺地域の再開発、全民健身政策や観光推進政策、公園の管理体制の変化などに伴って、極めてダイナミックに変化していることを明らかにしている。

以上本論文は、綿密な調査と分析によって、中国の特徴的な「晨練」活動の実態と時代に伴う変遷を解明している。場所と活動の対応関係の表現や、社会・空間意識の解釈など、今後検討されるべき課題はあるが、中国社会における都市の公共空間における活動・意識に関して、貴重な知見を提出しており、建築計画・都市計画の発展に寄与するところ大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。